
「令和3年度 飼料用米多収日本一」
受賞者の取組概要

【単位収量の部】

(敬称略)

農林水産大臣賞

1 小松田 光二 (秋田県)

農産局長賞

2 高橋 俊恵 (青森県)

全国農業協同組合中央会会長賞

3 加藤 禎行 (北海道)

全国農業協同組合連合会会長賞

4 農事組合法人 日の出生産組合 (北海道)

協同組合日本飼料工業会会長賞

5 農事組合法人 坊沢営農組合 (秋田県)

日本農業新聞賞

6 上田 隆 (秋田県)

【地域の平均単収からの増収の部】

農林水産大臣賞

7 坂本 静江 (岩手県)

農産局長賞

8 山口 弘則 (佐賀県)

全国農業協同組合中央会会長賞

9 増淵 文明 (栃木県)

全国農業協同組合連合会会長賞

10 関 富次 (秋田県)

協同組合日本飼料工業会会長賞

11 有限会社 アグリ：サポート (愛知県)

日本農業新聞賞

12 農事組合法人 ふながわ (富山県)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
べこあおば	約1.3ha	973kg/10a	371kg/10a(602kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人、妻、息子)
- 農地中間管理事業を活用し、飼料用米作付け圃場(1ha区画)を集約化

【作付品目】

- 主食用米・加工用米
 - あきたこまち 3.8ha
- 飼料用米
 - べこあおば 1.3ha

【取組のきっかけ】

- 農地集約による規模拡大を機に、需給調整を多収品種で取り組むことによって安定した収入が見込める飼料用米に着目し、平成27年から実需者と契約を交わし、生産に取り組んでいる。

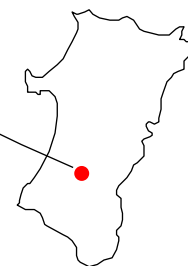
【取組概要】

- 令和2年度に作付した「秋田63号」でも約808kg/10aと多収は実現していたが、多肥の影響で倒伏が発生していたため、令和3年産は、より倒伏しにくい(稈が太く短い)多収品種の「べこあおば」に変更して取り組んだ。
- 施肥管理は、①土壌改良資材(シリカリン28号:20kg/10a)と、もみ殻をすき込み土作りを行い、②一発肥料を主食用より増量(基肥まくモン:N12.2kg/10a(慣行N9.5kg/10a))したが倒伏は発生せず、追肥を行っていないが多収を実現している。
- 雑草防除のため、水管理にこだわりを持っており、水田の中で田面(土壌)が露出する部分がないように水管理を行った。この結果、雑草の発生が抑制されたため、除草剤散布も一度で済み、かつ飼料用米の生育に対する雑草の影響がほとんど出なかった。
- 生産コスト低減のため、①集落運営の育苗センターで育苗後、緑化期から自分で露地プール育苗を実施(個人用ビニールハウスが不要、苗価格は地域の単価の半値程度)、②苗の植付密度を50株/坪(慣行60株/坪)とし、10a当たり育苗箱数を18枚(慣行23枚)に削減、③トラクター、側条施肥田植機、コンバイン、除草剤散布ドローンは複数の農業者と共同利用を行う等の取組を行っている。
- 出荷は、実需者がフレコンで直接運搬をすることから、包装容器代の削減や省力化、運搬経費の節減が図られている。



秋田県

横手市



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ゆたかまる	10.4ha	852kg/10a	170kg/10a (682kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人、妻、息子)、雇用1名、繁忙期に臨時雇用あり
- 無人ヘリによる追肥で省力化を図るとともに、額縁追肥で畦畔付近の成長しやすい株を太く育て収量増を図る

【作付品目】

- 主食用米
まっしぐら 3.6ha
- 飼料用米
ゆたかまる 10.4ha

【取組のきっかけ】

- 水田農業の経営発展と次世代への継承に向けて、作期分散による農業機械の効率的運用による規模拡大や経営の安定化を図られることを期待して、平成27年産から飼料用米生産に取り組んでいる。

【取組概要】

- 昨年まで作付けていた「みなゆたか」よりも、多収性、耐倒伏性及び耐病性に優れた新品種「ゆたかまる」を選定。
- 育苗中に2回液肥で追肥を行い、2回目は田植え3日前に施すことで、移植後の活着を促進。一部プール育苗を行い省力化を図っている。
- 施肥管理は、①基肥に一発肥料(成分30-10-10)を用いて窒素成分12kg/10aを施肥、②追肥は、多収に向けて2回実施しており、1回目は7月中旬にBB肥料を用いて窒素成分1kg/10a、2回目は倒伏に注意しながら7月下旬にNK725を用いて窒素成分1kg/10aを稲の生育状況に応じて、無人ヘリを用いてピンポイントに調整しながら散布、③畦畔付近4列の日光及び風通しが良い株に手散布で額縁追肥を行い、太い株に育てることで、多収を実現している。
- 多収に必要な生育期間の確保及び作業分散のため、先に飼料用米の田植えを行い、次いで主食用米を行い、また、飼料用米の収穫は、主食用米の収穫が終了してから作業している。収穫前に立毛乾燥を行い、乾燥経費低減を図っている。
- 多収及び省力化のため、地域の勉強会や意見交換で得た栽培技術を積極的に取り入れている。



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
そらゆたか、 さんさんまる	約5.9ha	873kg/10a	269kg/10a(604kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人、妻、母)
- 米を中心とした複合経営
- 収量向上と生産コストの低減を両立させる手法に取り組む

【作付品目】

- 主食用米 ゆめぴりか、ななつぼし等 16.1ha
- 飼料用米 そらゆたか、さんさんまる 5.9ha
- 新市場開拓用米 2.3ha
- 加工用米 4.9ha
- 大豆 2.0ha ○緑肥 0.4ha

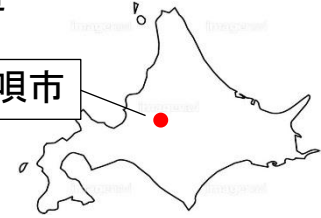


【取組のきっかけ】

- 田畑輪換での復田初年度は地力窒素が高まり、主食用米では低タンパク良食味米生産にならないことから、飼料用米としての多収栽培に向いていると考え、取組を開始。北海道の気候に適し、多収性のある「そらゆたか」を選定。

北海道

美唄市



【取組概要】

- 早晚性が異なる複数品種の栽培、移植栽培と直播栽培の組み合わせにより、作期を分散させ、各作業期における労働負荷の軽減を図っている。収穫時期が分散されることにより、適期を逃さない収穫作業が可能となっている。
- 小麦、大豆、水稻の順で田畑輪換を実施(畑作2年→水稻6年)。田畑輪換により、大豆根粒菌の窒素固定による地力の向上、畑地雑草、水田雑草の効率的な処理による除草剤の使用の軽減、水を張り、土壌菌を死滅させることで化学性農薬の使用も軽減といったメリットを感じている。
- 施肥設計は、麦わらすき込みで土壌物理性を改善し、土壌診断に基づき施肥設計を行い、畑作から復元1年目(全層肥料無し、側条肥料Dd778)、復元2年目(全層肥料BB008LPS慣行50%、側条Dd778)、復元3年目(全層肥料BB008LPS慣行100%、側条Dd778)それぞれに合わせた側条肥料及び緩効性肥料を使うことにより施肥効率を高め、飼料用米の収量増加を実現し、多収品種である「そらゆたか」では1,040kg/10aの収量を達成している。
- 病害虫及び雑草防除ではドローンを活用。自動航行機能が搭載されており、2台同時自動航行により、時間あたりの防除能力を向上させ、コストを低減している。また、雑草防除では、土壌処理剤及び初中期一発剤を使用することで防除回数を減少させており、更なるコスト低減を図っている。

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
そらゆたか	約6.4ha	835kg/10a	241kg/10a (594kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 平成23年設立
- 構成員 6名、従業員 9名
- 地域の将来を見据えH18集落営農組織、H23に農事組合法人を設立。農地集積を積極的に進め、持続可能な作物輪作による土地利用型農業により経営の安定を進めてきた

【作付品目】

- 主食用米 ななつぼし、きらら397等 39.3ha
- 飼料用米 そらゆたか 6.4ha
- 小麦 36.5ha ○ 大豆 33.0ha
- そば 12.1ha ○ 子実用とうもろこし 4.7ha
- その他 1.8ha



【取組のきっかけ】

- 平成18年から需要に応じた生産のため、将来の水田転作を取り組む手法の一つと考え、積極的に飼料用米の導入と多収の限界への取組を進めてきた。

北海道

旭川市



【取組概要】

- 北海道の気候に適しており、多収性もある知事特認品種「そらゆたか」を選定した。
- 施肥管理は、①慣行施肥（N肥6kg+側条3.4kg）に加え、②幼穂形成期に追肥（N肥、硫安2kg）を行うことで、効果的なもみの充実が図られ生育が向上し、多収を実現。追肥を実施することで、基肥の施肥量を一定程度削減できている。
- 生産コストの低減のため、①密播による育苗箱・育苗土の削減や移植作業の省力化、②除草初期剤はラジコンポート、初中期一発剤は無人ヘリで散布を行い労働力を削減、③追肥は尿素肥料のみを使用し、ビークルを用いてコストと労働力を削減している。
- 地域の畜産農家にもみ殻と麦わらを提供し、堆きゅう肥を購入しほ場に還元している。
- 土地利用型農業における転作作物の団地化栽培を取り進め、米・麦・大豆・子実用とうもろこし・そば等の輪作体系確立に尽力してきた。特に、子実用とうもろこしは平成29年から生産コストの低減と次作作物の収益向上、ほ場の土壌環境改善を目的に取り組んでおり、土壌根域の拡大や透排水性の向上により大豆や小麦の収量が年々増加してきている。

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
秋田63号	約40.3ha	807kg/10a	255kg/10a(552kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 平成19年法人設立
- 構成員67戸、役員7名、従業員2名
- 作業は構成員が行い、主食用米、飼料用米とも全て契約栽培。エダマメの調製・出荷は別法人を設立して効率化

【作付品目】

- 主食用米 あきたこまち 13.3ha
しきゆたか 19.6ha
- 飼料用米 秋田63号 40.3ha
- エダマメ 15.0ha
- 大豆 4.3ha

【取組のきっかけ】

- 大豆の連作障害を回避するとともに、作期の分散を図るため、平成29年に配合飼料工場への販路を自ら開拓して、飼料用米の取組を開始。

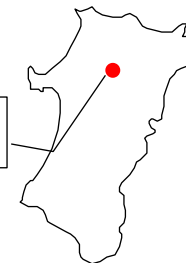
【取組概要】

- 多収性と耐倒伏性に優れ、地元JAが推奨する「秋田63号」を選定。健康な苗づくりのため、育苗期間に苗ローラーを使用し5回ほど圧力をかける。茎が太く、根張りが良い健苗を疎植することで、病気にかかりにくく、分けつも促進され、多収を実現している。
- 水稲と大豆、エダマメの輪作を3年サイクルで実施。作業の分散により、適切な時期に作業が行えるとともに、大豆後作の肥沃な土壌で飼料用米を生産することで多収を実現。一方、大豆、エダマメでは、連作障害の回避により、収量・品質が安定していると実感している。
- 生産コスト低減のため、①疎植栽培(10a当たり箱数:慣行25箱→14箱、移植密度12株/m²)を導入し、資材費と労働力を低減、②法人が農業散布用ドローンを所有し、従業員が作業することで省力化とコストを削減、③立毛乾燥による収穫、④全量ともフレコン出荷することで、燃料費や包装容器代、運搬経費の削減を図っている。また、増収に向けた施肥管理として、①稲わらのすき込みと、②一発肥料「基肥まくモン」を37kg/10a(N成分10kg/10a)施肥し、③追肥は7月下旬の幼穂形成期にN成分1.5kg/10aを無人ヘリで散布している。
- 水稲の疎植栽培は冷害に弱いと言われているため、気象状況等の見極め等、栽培技術の向上に努めており、一定の成果を上げている。このことから、地域の若手農業者が試験的に疎植栽培を実施する兆しもあり、地域農業の模範となっている。



秋田県

北秋田市



6 うえた たかし 上田 隆 (秋田県横手市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
秋田63号	約5.1ha	837kg/10a	235kg/10a (602kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人) 田植・稲刈り時、臨時作業員1名
- 米を中心とした複合経営

【作付品目】

- 主食用米 あきたこまち 5.3ha
- 飼料用米 秋田63号 5.1ha
- 飼料作物(青刈りトウモロコシ) 1.0ha

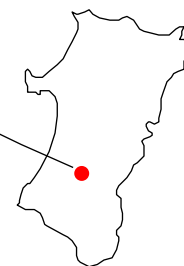


【取組のきっかけ】

- 稲作作業の省力化とコスト低減を行うため、平成26年から実需者と契約を交わし、飼料用米の生産に取り組む。これまで、秋田63号やめんこいな、ふくひびき等の品種で取組を重ねている。

秋田県

横手市



【取組概要】

- 令和3年産は、作付経験があり品種の特性や栽培のポイントを熟知している多収品種の「秋田63号」を選定。
- 苗は全てプール育苗を行い、水管理の省力化、経費削減を図っている。プール育苗によって、慣行と比べて良い苗ができ、田植え後の良好な初期育成につながった。
- 多収及び省力化を図るため、①基肥に安価な鶏ふんペレットを施用するとともに、田植え時に一発肥料(基肥まくモン、45kg/10a)と化成肥料(11kg/10a)をN18kg/10a(主食用米ではN12kg/10a)を施肥、②追肥はNK肥料をN1.5kg/10a施肥した。肥料は、大型量販店から安価で購入するなどして生産コスト低減を図っている。
- 飼料用米の作付けは、1ha区画に集約することで作業に係る移動時間を削減し、また、主食用米の収穫の後に飼料用米の収穫を行うため、作業の分散、コンタミ防止にもなっている。
- 出荷は、実需者がフレコンで直接運搬をすることから、包装容器代の削減や省力化、運搬経費の節減が図られている。
- 年3回、実需者と生産者が集まる生産技術についての意見交換に参加し、自己研鑽を行っている。

7 さかもと しずえ
坂本 静江(岩手県盛岡市玉山)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
つぶゆたか	約0.9ha	921kg/10a	337kg/10a (584kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人と次男)
- 畜産経営(肉用牛繁殖)の傍ら、自家生産の牛ふん堆肥や耕畜連携による鶏ふん堆肥の活用等のコスト削減を意識した飼料用米生産に取り組んでいる

【作付品目】

- 飼料用米
つぶゆたか 0.9ha

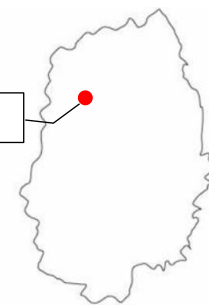
【取組のきっかけ】

- 地元実需者(鶏卵生産事業者)とJAとの地産地消による安全・安心な飼料供給を行う取組に共感し、平成24年産から飼料用米生産に取り組んでいる。



岩手県

盛岡市玉山



【取組概要】

- 飼料用米生産を始めた平成24年産から、多収性で耐倒伏性、いもち病抵抗性がある知事特認品種「つぶゆたか」で取り組んでいる。この間の栽培経験によって当該品種の特性を把握し、耕種と畜産の作業が重複しないように作業時間を考慮しつつ、ほ場巡回を徹底して行い、必要に応じて追肥等の管理を実施したことが多収につながった。
- 生産コスト低減のため、①自家牛ふん堆肥の散布(2トン/10a)、②飼料用米実需者である鶏卵生産事業者から耕畜連携(資源循環)により無償提供を受けた鶏ふん堆肥の散布(1トン/10a)、③収穫前の立毛乾燥、④労働力低減のため豆つぶ除草剤を導入している。
- 施肥管理は、牛ふん・鶏ふん堆肥の他、①飼料用米専用BB肥料(30~40kg/10a、倒伏しないよう調整)、②追肥にNKC23号(5kg/10a)を用いている。
- 地元実需者・JAと連携し、畜産飼料の安定供給を目的とした「地域密着型」の飼料用米生産に取り組んでおり、複数年契約によって取引価格の安定や流通経費の低減を図っている。

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ミズホチカラ	4.1ha	786kg/10a	271kg/10a(515kg/10a)

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人、妻)、繁忙期には数人を臨時雇用
- インターネット等を活用して、コスト低減や品質向上に向けた栽培技術の情報を収集し、試行錯誤している

【作付品目】

- 主食用米 さがびより 2.5ha
夢しずく 1.4ha
- 飼料用米 ミズホチカラ 4.1ha
- 小麦 シロガネコムギ 7.8ha
- れんこん 0.9ha たまねぎ 2.2ha

【取組のきっかけ】

- 平成28年に実需者(養鶏業者)からの要望で飼料用米の取組を開始した。

【取組概要】

- 耐倒伏性が強く、多収かつ栽培が容易なため、ミズホチカラを作付けし続けている。ミズホチカラは晩生品種のため、主食用米の収穫・乾燥調製より後に収穫できるため、作期分散、労力分散が図られている。また、飼料用米、主食用米、麦の輪作により、土地の有効利用を図っている。
- 生産コスト低減のため、①自家育苗・密播種、②疎植(60株/10a、10aあたり15箱)、③基肥は、田植時に側条施肥、④主食用米、飼料用米の作付の団地化、ほ場は自宅の近辺に整備、⑤実需者への販売価格をJA出荷より有利な条件で契約し、近隣の取組生産者と共同で出荷(20トン車の使用)、⑥稲わら・麦わらを近所の畜産農家に供給し、牛ふん堆肥、発酵鶏ふんの提供を受ける等、様々な取組を行っている。
- 施肥管理は、①裏作の麦わらをすき込み、②牛ふん・鶏ふん堆肥を利用するとともに、③基肥(化成肥料(14-14-14))に加え、④9月に追肥(追肥グローアップ3844(1kg/10a:降雨により適期に施肥できなかったため少量))を行っている。
- 実需者と、年に数回施肥のタイミング等の肥培管理について打ち合わせを行い、生育状況の確認を行いながら管理しており、実需者ニーズを満たした品質の飼料用米を出荷している。



佐賀県



9 増産 文明 (栃木県芳賀郡芳賀町)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
北陸193号	約1.34ha	871kg/10a	295kg/10a (576kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収



【経営概況】

- 家族経営(本人)、農繁期には家族が手伝い
- 新規需要米の制度発足時から、飼料用米の肥培管理に専念するため、あえて主食用米は作付していない

【作付品目】

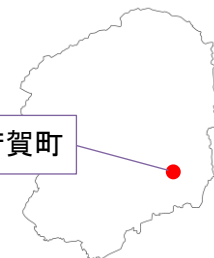
- 飼料用米:北陸193号 1.34ha
- 自家用野菜 0.15ha

【取組のきっかけ】

- 平成30年産まで「あさひの夢」を作付していたが、近隣の大規模農家から「北陸193号」を紹介され、多収が期待できる等の理由により、令和元年産から作付けしている。

栃木県

芳賀郡芳賀町



【取組概要】

- 令和3年産は、生育ステージ毎の水管理や追肥等のタイミング、天候などが味方して多収となったと感じている。栽培技術は、特に変わったことは行っていないが、毎日朝晩の水管理や、病害虫防除のためのこまめな畦畔の草刈り等、基本的なことを徹底している。水管理については、9月1日が用水切り上げであるが、ほ場の具合を見ながら極力水切りを遅くした。
- 稲わらを10aあたり450kgすき込み、稲わらの腐熟を促進するため、収穫後直ちに数回の耕起を行い、年明け後も数回の耕起を行っている。
- 北陸193号は、穂重型品種のため穂数が少なく、極端な疎植では穂数不足で収量が低くなる場合があるため、株数を50株～60株/坪で調整しながら田植を行っている。
- 施肥管理は、田植え前に、多収品種専用一発肥料(BB飼料用米211)をブロードキャスターにより10aあたり50kg全層に施肥。追肥として、輸入尿素(窒素46)を10aあたり2.5～3kg使用。輸入尿素は、粒が大きく背負い型動力散布機で散布した場合、水田に入らなくても畦畔から遠くまで飛ばすことが可能なため、作業の省力化になっている。また、収穫前に立毛乾燥を行い、乾燥コストを抑えている。
- 農業関係者と密に意見交換を行い、新しい品種の導入や効果的な栽培方法を実践している。

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ふくひびき	約1.0ha	815kg/10a	258kg/10a(557kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人、息子(農繁期のみ))

【作付品目】

- 主食用米
あきたこまち 0.7ha
- 飼料用米
ふくひびき 1.0ha

【取組のきっかけ】

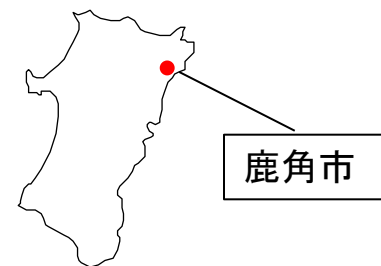
- 圃場の土壌性質が粘土質であり、畑作物の作付には向かないため、水稻と同様の作業で省力化と多収化が可能な飼料用米の取組を始めた。飼料用米の単収は、堆肥の利用により、令和元年産以降、毎年800kg/10aを越えている。

【取組概要】

- 耐倒伏性及び耐病性に優れ、多収が期待でき地元JAでも推奨している「ふくひびき」を作付けしている。主食用米は早生品種、飼料用米は中生品種を選定することで、肥培管理が分散できている。
- 施肥管理は、①稲わらのすき込み、②地元の養豚業者から購入した豚ふん堆肥の散布(400kg/10a)、③リン(20kg/10a)、カリ(20kg/10a)、一発肥料(基肥まくモン、35kg/10a)を使用し、追肥を行っていないが多収を実現している。
- 作業の省力化・効率化を図るため、①苗を地元JAから購入することで育苗作業を削減、②害虫防除をJAの無人ヘリ組合に依頼をすることで大幅な時間短縮、③乾燥・調製及び出荷作業は、主食用米の収穫から飼料用米の収穫まで7日から10日の期間があり、その間に飼料用米の立毛乾燥を行い、コスト低減を図った上で、近隣農家に依頼、等の取組を実施。
- 栽培技術の向上のため、JA主催の飼料用米の栽培管理に関する説明会等に参加し、肥培管理指導を受けながら、日々の水管理や生育状況を見ながら適期の防除や中干し等、適正な肥培管理を実践することで、毎年多収を実現している。



秋田県



鹿角市

11 有限会社アグリ:サポート 代表取締役 立松 國彦(愛知県海部郡飛島村)

たてまつ くにひこ

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
もみゆたか	約8.8ha	739kg/10a	226kg/10a(513kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 法人経営(40人雇用うち正社員21人、パート12人、実習生7人)平成10年設立
- 地域の耕地の集積を進めており、水稲を中心に麦、大豆、野菜を作付けしている

【作付品目】

- 主食用米 コシヒカリ、あいちのかおり 20ha
- 飼料用米 もみゆたか 8.8ha
- 酒米 1.0ha ○小麦 34ha ○大豆 20ha
- 野菜 25ha ○ミニトマト(施設) 0.6ha



【取組のきっかけ】

- 飼料用米は、主食用米と作期分散できることや、麦・大豆との輪作で多収が期待でき、規模拡大や経営の安定化が図られることから、平成27年から取組を開始した。



【取組概要】

- 愛知県が開発した多収性品種であり、この地方の気候風土に適している「もみゆたか」を選定。令和3年産は、天候に恵まれたことに加え、水管理を見直し、例年より水張を15日長くしたことが、多収につながったと感じている。
- 施肥管理は、①土壌改良剤(鶏ふん 150kg/10a、卵かく 500kg/10a)、②基肥(側条エース中生用((24-13-10)50kg/10a)、③追肥(NKエース(16-0-10)10kg/10a(7月、9月))を使用。特に、倒伏防止、収量増加のため、適切な時期(田植後1ヵ月)に追肥(根肥)を散布することを重視している。
- コスト低減の取り組みとして、①苗箱1枚当たりの種子量を増やし(260g/箱 慣行200g/箱)苗箱の枚数を削減、②田植と同時に基肥、除草剤を散布することでコスト低減や初期成育の向上を図り、③自動運転機能搭載の田植機を使用し作業効率を高め、④使用する鶏ふんは、安価なフレコン詰め物、卵かくは、本来、廃棄となるものを安価に入手して活用する等、様々な取組を実施している。今後は、ドローンの活用等、スマート農業への取組を進め、より効率的な経営を目指していきたい。
- 稲・麦・大豆の2年3作輪作を行うことで、農地の有効活用や、地力の維持・向上につながり、飼料用米の多収化、田畑転換により漏生稲のコンタミや雑草の省力的な抑制、連作障害の回避により麦・大豆の収量向上といった効果を実感している。
- 地域の農地を維持していくため、農地中間管理機構を活用しながら毎年2~3ha規模拡大しており、水田50ha程度までの拡大を考えている。

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
やまだわら	約4.7ha	778kg/10a	226kg/10a(552kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 組合員 [R3]:32名
- 地域の若い担い手の問題提起を機会として設立された集落営農組織から始まり、平成19年に法人化して発足

【作付品目】

- 主食用米
コシヒカリ、富富富、てんたかく 34.9ha
- 飼料用米 やまだわら 4.7ha
- 大豆 えんれいのそら 10.4ha



富山県

朝日町



【取組のきっかけ】

- 平成27年に大区画ほ場整備(一筆1ha区画)をした際、飼料用米の作付を勧められ、「やまだわら」の作付を開始。倒伏しにくいことや作期分散が図れることが確認できたことから、種子生産体制の拡充にあわせて徐々に作付面積を拡大している。

【取組概要】

- 土づくりを基本とし、ケイカルにリン酸、カリを加えた配合肥料(120kg/10a)、鶏ふん(200kg/10a)を散布。また、コンポキャスタ(肥料散布機)を導入して散布を効率化している。
- 主食用米の移植栽培、主食用米の直播栽培、飼料用米の順で収穫できるように作付し、作期分散。併せて、ほ場の水管理を徹底し、高単収を確保している。
- 飼料用米のほ場を固定することと、機械の清掃を徹底することで、主食用米への混入を防止している。
- 大区画ほ場の整備と飼料用米の団地化による効率化に加え、大区画ほ場に適した畦畔の傾斜が緩やかな耕作道(低段差緩傾斜耕作道)を整備して、大型機械の乗り入れやターンを容易にし、更なる効率化を実現している。
- 除草剤は、投げ込み式の大規模農家用製品を使用し、コストを低減。また、畦畔には芝を植えて畦畔除草の労力を軽減。
- 平成29年からスマート農業の取組を開始。センサー搭載コンバインを活用し、翌年のほ場毎の栽培管理に活用している。